満鮮旅行の途次、京城の森書店に居られ京城駅で再会を喜び合いリンゴ一籠を頂いて級友とおいしく食べた事を忘れません。程なく大阪の関西大学に入学、成績優秀で卒業後は渡米まで決定していたのに卒業の直前、靴ずれから敗血症になり他界されました。肉親の縁の薄い先生の御悲嘆如何ばかりであった事かと推察し、此の時ほど人生の無情を感じた事はありません。道明君在りし日の記念にと愛読書を戴きました。

ここに永年にわたる御教示、御愛顧を深謝申し上げ、先輩の御冥福を祈念してお別れのことばを申し上げます。

薩摩半島研修旅行記

五月六日（木）―八日（土）

約七百年にわたる島津氏の支配下に、一独立国の観さえあった薩摩の歴史探訪は、史談会の研修部を中心に衆知を集めて計画立案しただけに、参加会員は特色のある薩摩の文化財や風物のすばらしさに感動し、十分に満足した。コースは運転手さんもガイドさんも未知の地、道案内は特に参加された軸丸会員が主にあたった。

参加会員が二十一名と少いことは残念であった。執行部は最悪の場合には中止もと考えたが、大分バスの特別のお計いによって、大型バスでゆっくり旅を楽しむことができた。改めて大分バスの御好意に感謝申し上げたい。

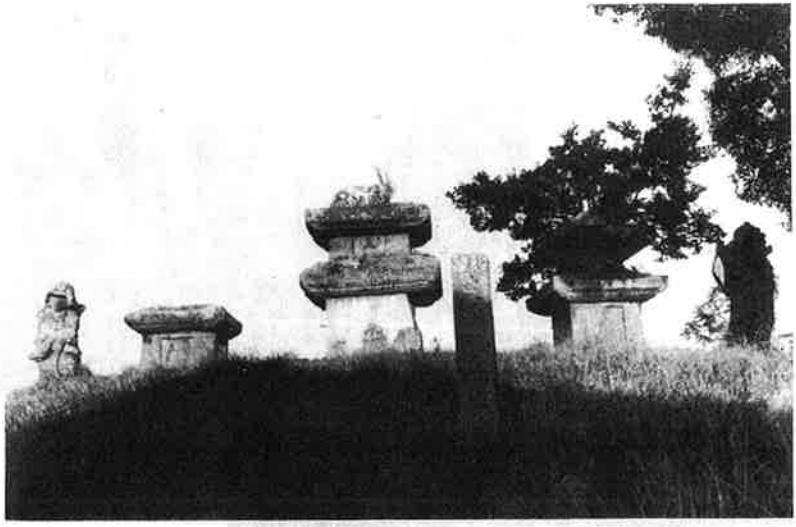
報告は読むよりも見た方がと考えて、主な探訪地の写真の一部を掲げた。紙数の都合で、説明不足の分は御許しを請う。

探訪地

六日　国分市（大隅国分寺跡）―隼人町（隼人塚）―鹿児島市（福昌寺跡島津墓地）―指宿温泉泊

七日　開聞町（枚聞（ひらきき）神社）―坊津町（歴史民族資料館・一乗院跡・密貿易屋敷）―知覧町（武家屋敷・特攻基地跡）川辺町（清水（きよみず）磨崖仏塔群）―加世田市（六地蔵塔）―吹上温泉泊

八日　東市来町（陳寿官陶苑）―郡山町（花尾神社・田の神・川田堂園供養塔群）―一路佐伯へ

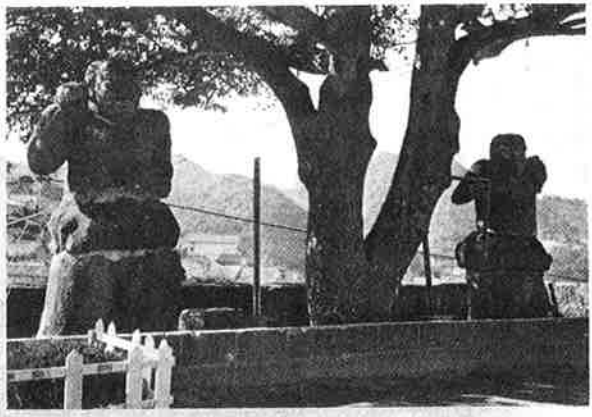


国指定　隼人塚（隼人町）

隼人塚は征伐された熊襲の霊を慰め、その災を免れるため和銅元年（七〇八）にこれを建て、供養を行ったと言い伝えられているが、他にも説があり、謎に包まれている。いずれにしても、低い封土の上に石造多重塔三基と、四天王像を安置した形式は類例がないという。石造物は平安末期のものと推定されている。

大隅国分寺は出土する布目瓦の文様形式から、創建は奈良時代末期ごろと考えられる。石造層塔には康治元年（一一四二）十一月六日の記銘がある。国分寺は廃絶・再興を繰り返し、元禄年間にまた再興されたが、明治初年の廃仏毀釈で廃絶した。

国指定　大隅国分寺跡（国分市）



一乗院跡の仁王石像

一乗院跡にある坊泊小学校々門の傍らにある。大永二年（一五二二）室町末期、頼全上人のとき建立したといわれる。廃仏毀釈の時、下の道路側に引きずり出され損傷した。

一乗院跡の上人墓

一九基の上人墓がある。この形式は日本でも珍らしいという。高さ60㎝、約1.2㎡の方形、石の厚さ12㎝、正面に上人名が刻まれている。茂っていた松も松喰虫で枯れ、雑草のみ繁っている。

坊津（ぼうのつ）

坊津は昔、安濃津（あの）（伊勢）博多津（筑前）と共に日本三津とうたわれた。遣唐使船や勘合符貿易船の主な寄港地また倭寇の活動基地、鎖国時代には密貿易の拠点として栄えていたが、享保の唐物崩れ（からものくず）（密輸清国船打ち払い）によって衰微していった。

西海仏教文化の先進地一乗院は五八三年に百済僧日羅（にちら）がこの地の丘に上、中、下の三坊舎を建立して龍厳寺と号したことにはじまる。坊津の地名もこれに由来するという。この寺は一一三三年に鳥羽上皇の院宣により「如意珠山一乗院」の勅号を、また後奈良天皇に「西海金剛峯寺」の勅号をうけ、島津氏の尊崇もあつかったが、ここもまた廃仏毀釈で壮厳華麗な堂塔伽藍も破壊されてしまった。

鑑真和上の上陸地もこの地である。

知覧武家屋敷は約七百mにわたって続き生垣が美しく静なたたずまい。こんな生垣の美しい町は珍らしいのではないか。武骨一辺の薩摩武士とのイメージはとんだ思い違いであったことを知らされる。よく保存されている。

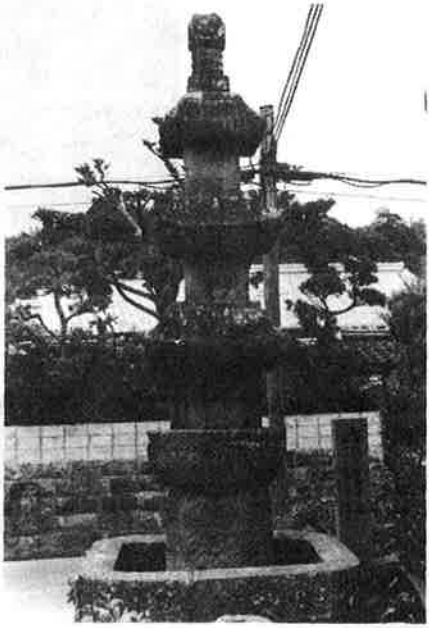
武家屋敷の庭園　門を入ると堅固な防塁の石垣につき当たる。更に石垣を廻ると眼前にすばらしい庭園が開ける現在六軒の庭園が開放されている。京都から来た庭師に作庭させたという。枯山水が多い。

特攻基地跡　尊い命を国のために花と散らせた若い特攻隊員、特攻観音堂には一〇一五柱の芳名を奉納している。遺品館で見る遺品の数々に涙を新にする。もう二度と戦争をしてはならないと心に誓う。

清水磨崖仏塔群（川辺町）

清水磨崖仏塔群は高さ十五m、長さ四百mの崖壁に、鎌倉中期から明治中期まで約五五〇年間にわたって、各種の仏塔が多数きざまれていて、規模の大きいのに驚く。三二基の宝篋印塔をはじめ日本最大の大五輪塔など大部分が線刻で、他は浅い彫りの小五輪塔が目立つ。深い彫りの仏像は写真のもののみ。

鴻巣馬場六地蔵三重石塔は丸鉢形の請台のため四重塔に見えるが三重塔である。珍らしい構成で善美を尽くした手法が用いられている。領主島津日新斎が天文七年（一五三八）の加世田合戦に戦死した多数の敵・味方の菩提を弔うために建立した。



鴻巣馬場六地蔵三重石塔（加世田市）

川田堂園供養塔群（郡山町）

川田堂園供養塔群は比志島川田氏の供養塔で、高さ二・五mにも及ぶ二基の層塔を中心に、川田氏の先祖の名を刻む数基の大五輪塔の外、大小各種の石塔が並んで壮観である。

田の神　土地の人は「田の神どん」「田のカンサー」と呼ぶ。全県域と都城地方（旧島津藩）の田圃のあぜ道や、田圃を見下す小高い丘、やぶかげにスリコギ・ワン・ニギリメシ・クワ等のさまざまな持ち物、頭にはコシキをかぶり、農民・僧・武士・おどり姿等々。重い取り立てに農民達は田の神に豊作を祈り、田の神舞を舞った。田の神の明るい笑顔は農民と共に生き続けている。

田の神（郡山町）